

イギリスの日本語教育の現状と課題

吉岡英幸

1 はじめに

筆者は、1994年3月末から1年間、シェフィールドとケンブリッジに滞在して、イギリスの日本語教育についての現状調査を行った。本稿は、その資料をもとにイギリスの高等教育機関の日本語教育の現状を紹介すると同時にその問題点を考察し、今後のイギリスの日本語教育の一層の発展のための課題を探らうとするものである。

本稿では、初めに高等教育機関の具体例としてケンブリッジ大学の日本語教育を取り上げ紹介する。続いて統計資料や使用教材を中心にイギリスの高等教育機関全体の日本語教育の現状を探る。最後に、イギリスの高等教育機関における日本語教育の今後の課題は何かを検討する。

2 ケンブリッジ大学の日本語教育

1) 組織

ケンブリッジ大学の日本語教育は、東洋学部の Japanese Studies で行われている。学部には正式には学科という区分はないが、Japanese Studies のスタッフは対外的には日本研究科という名称を用いているので、ここでも Japanese Studies のことを日本研究科と称することにする。ケンブリッジ大学の日本語教育は、学内の他の専門の学生が外国語教育の一つとして登録し学べるという制度ではなく、日本研究科の学生だけを対象としている。つまり、日本研究を主専攻とする学生だけが必修科目として日本語を学ぶことができるのである。

教師陣： 日本研究科の授業を担当する正式なスタッフは、professor 1名（原則として学科に1名しかいない主任教授）と lecturer 5名、そして日本語教育担当の2名の、計8名で構成されている。日本語教育担当以外の6名の専門は、日本文学2名、日本史2名、日本の政治・経済、社会・産業が1名ずつである。日本語教育担当者は2名とも日本語を母語とし、その身分は、senior language teaching officer in Japanese と、lector in Japanese である。前者は日本語教師のために新しく作られたポストで、毎年厳しい研究業績を要求される lecturer と待遇はほとんど変わらない教育専門のポストである。後者は1年ごとの更新で、国籍が EC であれば最大5年まで、それ以外なら3年までのポストである。『学生のためのガイド』には、この8名のほか、考古学と宗教学を専門とするスタッフも1名ずつ記されており、この分野の卒論などを選ぶ学生がいた場合の対応も考えられている。その他、オックスフォードと共に独特のシステムである週1回の個人指導をケンブリッジではスーパービジョンと呼んでおり、1年生は日本語のクラスの時間に振り替え、他の学年では日本から来た客員研究員などに、主として日本語の運用能力向上のための指導を依頼している。

学生： 一般にイギリスの大学は3年制であるが、ほとんどの大学の日本語科・日本研究科は4年制であり、ケンブリッジ大学の日本研究科も同様である。1995年3月時の学生数は、1年生14人、2年生13人、3年生5人、4年生8人の計40人である。

2) カリキュラム

3学期制をとっており、授業は秋学期8週間、冬学期8週間、春学期4週間の年間20週行われる。

1年生： 1年生の授業は、論文の書き方の指導などを含む歴史の授業以外全て日本語の授業であり、中心は GRAMMAR と EXERCISES である。この二つは連動しており、月曜から木曜までの午前中 GRAMMAR で導入を、火曜から金曜までの午後 EXERCISES で練習を行うことにな

	GRAM- MAR	EX- ERCISES	WRIT- ING	漢 字 テスト	会話	歴史	TEXT	計
秋	4	4	1	1	1	2		13
冬	4	4		1	1	2		12
春						2	6	8

っている。そして、その週に提出された漢字を週1回の漢字テストの時間にチェックする。WRITING はかなや漢字の日本語の表記についての概説的な知識を与え、興味を持たせることを目的にしている。TEXT は、『気紛れロボット』(星新一)と『羅生門』(芥川龍之介)を教材とし、それぞれ3時間ずつの読解の授業である。オックスフォードの『河童』と並んで、1年生の日本語の授業の仕上げとして『羅生門』を読むという昔からの伝統は今も受け継がれている。

2年生:

	日本語	TEXT	歴史	政治	社会	文学	古典	計
秋	4	2	3	2		1	2	14
冬	4	2	3	2	2	1	2	16
春	4				2			6

日本語の授業は、自作の教材や市販の中級用のテープなどを使用している。日本の政治・社会・文学は選択科目で、この三つの中から二つを選ぶ。また、2年生の初めに文学系か社会科学系を選択することになっていて、文学系の場合古典の学習も必修となる。古典の授業では、古典文法のプリントは配布しておくが、文法の説明から入るのではなく具体的な作品を通して文法も随時理解させていくという方法をとっている。秋学期は『方丈記』、冬学期は『古今集』『山家集』『新古今集』から選んだ和歌と『宇治拾遺物語』を教材としている。学生には『古語辞典』を引かせ、教材の作品を英語で解釈させるという授業を行っている。

3年生: 2年目の授業が終了した夏に、学生は日本への研修に出発する。

いろいろな企業で研修し、秋から3か月間金沢市の石川県国際文化交流センターで日本語の集中教育を受ける。そして、冬学期から大学に戻り、日本での成果の上に、次の科目を履修する。

	TEXT	日本語	古 典	計
冬	4	2	2	8
春	4	2	2	8

日本語の授業は、衛星放送から録画したテレビのニュースなどを教材とした聴解、新聞や雑誌などを教材とした読解が行われている。また TEXT では文学作品が扱われるが、これらの授業では、日本語から英語への翻訳、日本語の文章を日本語で要約、さらに英語から日本語への翻訳などの訓練も行われる。

4年生:

	TEXT	日本語	古 典	計
秋	6	2	2	10
冬	2	2		4
春	2	2		4

日本語の授業は、その日の新聞記事の中から適当なものを選んで読解を行い、その後そのテーマについて日本語で討論させる。また、衛星放送の録画によるテレビのニュース解説などを聴解として使用する。TEXT の授業では古井由吉の小説などが教材として選ばれている。また、最上級学年は、日本語の資料に基づく英語の卒論が課せられているため、多くの時間を論文作成に費やすことになる。

3) 日本語教育の内容

目標: 最終学生である4年生は「長文の英語を読んで、その主な内容を日本語で、口頭でまたは簡潔に書きあらわすことによって、表現できるようになることをひとつの目標としている。」また、ケンブリッジの日本語教育は「将来職場で、また大学院に進んだ者の研究の手段として、十分に

使いうる日本語を学ばせるということを目的としている」。そのために、「会話よりも読み、書きに重点がおかれる」¹⁾ ことになっているという。

卒論は4年間の日本語及び日本研究の総決算となる作品であるが、学生の最近の卒論のテーマを見ると、「徳川時代の尊皇思想」「徳川時代の出版物に描写されたキツネ」「能・浮舟の注釈付翻訳」「1980年代末の日本のパブル」「日本の金融市場における大蔵省の役割」「武満徹の作品と音楽哲学」「現在の日本が抱える外国人労働者問題」などである。

教材、教授法：1年生が使用する教科書はケンブリッジ大学で作成された『An Introduction to Modern Japanese 1・2』(Richard Bowring and Haruko Uryu Laurie, Cambridge University Press, 1992)である。2冊に分かれており、1が Grammar Lessons で、2が Exercise and Word Lists である。全体は52課の構成で、1週10時間、2つの学期16週間でちょうど終了するように作成されている。提出語彙は約2,500語、漢字は870字余り、構造シラバス中心の構成で文法事項や語彙は英語でかなり詳しく説明されている。学生は予習と宿題で大体5時間の自宅学習を要求されており、GRAMMAR の授業は予習を前提として英語による理解確認と、そのための練習が行われる。午後の EXERCISES はその課の文型定着のための練習が中心であるが、英語を言って日本語に直させるという形式が多いようである。進度が速くこのスピードについていくのは大変のようであり、学生の優秀さという条件があってはじめてこのカリキュラムが組めるといえよう。毎年ドロップアウトするのは約1割という。1年の3学期目に『羅生門』を辞書を片手に読む(英訳)というのは、東洋学部の他の語学の専攻と同じようにナマの文学作品を読むというレベルに到達するという満足感と動機付けにするという意味もあるようである。授業時間数が少ないため十分な練習ができず、しかも日本と違い教室の外で日本語に触れる機会が全くないということから、頭で理解する部分が多く、特に話

1) 「ケンブリッジ大学における日本語教育」 瓜生温子 『日本語教育年鑑』1991年版 アルク

し聞く力がやや落ちるのは仕方のないことであろう。2年の授業では試用版の中級教材を使用して語彙や文型を、『An Introduction to Modern Japanese』(ジャパントタイムズ),『ニュースで学ぶ日本語』(凡人社),『ちょっとひとこと』(朝日カルチャーセンター)などのテープを使って聞き取りや会話なども行うが、こうして習得した日本語が、コミュニケーションの手段として十分活かされるようになるのは、3年のときの来日を待たなければならないという。日本から帰国すると日本語の力は格段に進歩し、以降の学習もやりやすくなる。3年生の冬学期・春学期の使用教材はナマ教材で、新聞・雑誌で読解、テレビのニュースを中心にして聴解の授業が行われる。最終学年は長文の英語を読んで、その要旨を日本語の口頭または文章によって表現させたり、その日の日本の新聞を読ませ、そのテーマについて日本語で討論させるという授業が行われる。そして大半の時間は卒論の完成のため日本語の資料を調査・研究する。

評価: ケンブリッジ大学の評価は、1年に1回春学期に行われる Tripos と呼ばれる学年末の試験によって成績がつけられる。3年生を除く全学年が受験するが、2年生は Tripos で不合格をとると退学となるため、特に真剣となる。1994年の1年生の試験は J1 から J5 の5種類あり、5月末から6月にかけて、1日1種類行われた。J4 は歴史の問題なので日本語は4種類である。日本語の問題の内容は次のようなものであった。

J1 は授業でやった教材の中からの出題で、『羅生門』と『気紛れロボット』の中のそれぞれ1段落の英訳と、その中の語句の幾つかを取りあげ文法的な質問に答えさせるもの。J2 は、授業でやっていないものからの提出で3問あり、出典は『大人の国イギリスと子供の国日本』(マークス寿子)と、中等新国語からの湯川秀樹の文章、『風の中の子供』(坪田譲治)のそれぞれ1段落の文章の全てを英訳させるものである。J3 は3問あり、1番が英語の短文を日本語に訳させるもの、2番がまとまった内容の英語の文章の和訳、3番が3つのトピックから1つ選んで原稿用紙に作文させるものである。J5 は ORAL EXAMINATION で3問あり、1番が聴

解。2番がインタビュー形式の話し方の試験で、絵を見せて説明させたり、あるテーマを与えそれについて話させるもの。3番は J1 のテキストの一つ『羅生門』の文章の1部を与え、その場で読ませ発音やイントネーションをチェックするものである。

2年生の和文英訳として出されたものは、『普請中』(森鷗外),『網走まで』(志賀直哉),『冷戦後』(船橋洋一),『漱石の倫敦, ハワードのロンドン』(東秀紀),『M/Tと森のフシギの物語』(大江健三郎),『官僚たちの夏』(城山三郎),『サッチャー時代のイギリス』(森嶋通夫)であり、各1段落の全てを英訳することが課せられる。ORAL EXAMINATION は、グループディスカッションとロールプレイをやらせてそれを評価するというもの。

4年生の和文英訳として出されたものは、『昭和史探訪』(三国一郎),『アジアから来た花嫁』(宿谷京子),『鳥のように, 獣のように』(中上建次),『浮城記』(大岡昇平),『雪』(三島由起夫),『キッチン』(吉本ばなな),『自叙伝 死灰の中から』(大杉栄・伊藤野枝編),『近代詔勅集』(村上重良編),朝日新聞の記事などであり、各1段落の文章全てを英訳するのが問題である。ORAL EXAMINATION は、ラジオのニュース解説の聴解, スピーチ, その場で渡された英語の新聞を読ませて日本語でその要旨を言わせるものとなっている。

1回だけの試験で1年間の成績が決まるというやり方に対し学生などからも不満の声がないわけではないが、そこは長い伝統の継承という面もあり、改革のための検討という声は聞かれないうである。各学年の特に UNSPECIFIED TEXT の問題は、授業で扱われず試験で初めて見る文章であるが、それらのナマの文章も決して易しいものではなく、それを細かい文法事項はもちろん文体的な特徴も含め英語に訳すことを要求するという。少なくとも読解のレベルでは非常に高い目標設定をしていることがうかがわれる。

ケンブリッジ大学の日本語教育の特徴: ケンブリッジ大学の日本語教育

の特徴は、まず指導体制が整っていることであろう。日本語担当者のためのポストが作られ、10年近く日本語教育を担当してきたベテラン教師の存在が大きい。そのため、目標設定もかなり明確でそれに添ったカリキュラムや初級教科書が作成されているなど、日本では特に珍しいことではないが、イギリスでは他の機関にあまり見られない特徴となっている。また、学生が優秀なことも特徴の一つであろう。ケンブリッジといえばオックスフォードと並びその学生は超エリートといわれるが、1年生の最低5時間の自宅学習もほぼ全員実践しているという。能力だけでなく学生の大変な努力が、十分でない授業時数の中での高い到達目標を可能にしているのである。さらに、図書館の貴重な古書のコレクションを含む8万冊余りの日本語の蔵書や、スーパービジョンの制度などの教育環境、カレッジにおける恵まれた生活環境など、現在イギリスで最も整った条件を備えていると考えられるのである。

ただ、初級教科書が作成され学習項目や指導法が確立されている1年生は別にして、2年生以上のシラバスや聴解・口頭表現などの目標、TEXTの授業との関連などをどのように考えるべきか、難しい問題のように思える。作成中の中級教材の完成を待ちたい。また、日本で生活しながら学習する3年生の日本研修の意義は大きい。教育予算の削減や円高などのために1996年秋からは1年間企業などに預ける形の研修になるという。

3 イギリスの高等教育機関における日本語教育

1) 日本語教育の概況

イギリスの日本語教育についての資料で最も新しく、そして詳しいのは1993年の調査による『海外の日本語教育の現状』（国際交流基金日本語国際センター編、1993年）である。以下この資料をもとに、イギリスの大学を中心とする高等教育機関における日本語教育の特徴を西欧の他の国と比較しながら探してみたい。

この資料によるとイギリスで日本語教育を行っている高等教育機関は

45 機関である。この 45 の機関の日本語教育がいつ始められたかを 5 年ごとに区切って、機関数を見てみると、次のようになる²⁾。

日本語教育開始年別機関数：

年	～1959	60～64	65～69	70～74	75～79	80～84	85～89	90～	無記入	計
機関数	2	1	1	1	0	9	10	19	3	45

1980 年代から日本語教育機関の開設が目立つが、これはケンブリッジ大学の日本研究科に「1980 代半ばからの急激な学生数の上昇」が見られたが、これは「この時期からそれまでの研究職、ジャーナリズム、日本での英語教師といった就職先に加えて、金融機関からの求人の数が著しく増した」と深く関連している³⁾ という企業・経済界の動向が、イギリスの大学全体に波及していった結果ではないかと思われる。

イギリスの高等教育機関の日本語教育の現状を見るために、学習者数が千人以上の西欧の他の国の数字と比較して示すと、次のようになる。

機関数・教師数・学習者数：

	イギリス	フランス	ドイツ	イタリア
数 機 関 数	45	64	42	13
教 師 数	133	175	124	406
学 習 者 数	1865	4950	4748	1457

イギリスの学習者数は、世界 8 番目のフランス、9 番目のドイツより少なく、西欧では 3 番目、世界では 14 番目に当たる。

1 機関数当たりの平均日本語学習者数は、イギリス 41 人、フランス 77 人、イタリア 112 人、ドイツ 113 人となり、イギリスが最も少ない。イギリスの日本語教育は、イタリアのように少ない機関に多くの学習者を集め

2) 『海外の日本語教育の現状』では 1959 年までに開設された機関を 1 としているが、ロンドン大学、ケンブリッジ大学の 2 校あるので訂正し 2 とする。

3) 「ケンブリッジ大学における日本語教育」瓜生温子『日本語教育年鑑』1991 年版 アルク

て行う集中型ではなく、いろいろな機関がそれぞれ教育を行う分散型であるということが言える。ちなみに日本国内の状況を見ると、平成6年11月現在の大学の日本語教育実施機関数407、日本語学習者数16,731人であり、1機関当たりの平均学習者数41人であるから⁴⁾、イギリスは日本の大学と同じ状況であるといえる。

教師1人当たりの平均日本語学習者数を単純計算すると14人であり、イタリアの3.6人は例外としても、フランスの28人、ドイツの38人と比べれば、かなり恵まれているといえることができる。

また、日本語教育で使用されている教育機器を見ると、次のようになる。
日本語教育で使用されている教育機器：

	スライド プロジェ クター	テープレ コーダー	VTR	コンピ ュータ	映写機	OHP	その他	計
イギリス	11	42	41	17	7	25	7	150
フランス	7	55	57	9	6	5	2	141
ドイツ	17	39	33	12	9	20	4	134
イタリア	4	9	10	3	1	6	1	30

イギリスの場合の機器の保有状況は、テープレコーダー 93%、VTR 91%、OHP 56%、コンピュータ 38% となっており、他の西欧の国と比べ、教育機器の面でも好条件のもとで日本語教育が行われているといえることができるのである。

2) 日本語教育の内容

戦時中ロンドン大学 SOAS (東洋アフリカ研究所) で日本語を学び、外務省に入って駐日英国大使となったサー・ヒュー・コートッチは、1991年に雑誌の対談で、日本語の学習を少数の“センター”に集中させるべきか、それとももっと均等に全国に広めるべきかという質問に対して、「本当に効果的な日本語の教授法が開発されるまでには(そのような教授法は

4) 『平成6年度 国内の日本語教育の概要』文化庁文化部国語課

現在, “センター”の中で開発されつつあると思いますが), すくなくともいくつかの“センター”が必要でしょう。そして, そこをベースにして他へ広めることも可能になるでしょう。パーカー・レポート⁵⁾が出る前のセンターには, 相当のプレッシャーがかかっており, もともと期待されていた役割が果たせなかったように思います(例えばシェフィールドのように)。したがって, センターをさらに強化させることが必要だったわけです。とくに, 新しい教材や教授法の開発が必要でした。それがまずないぶんには, 他へ広めることはちょっと無理だったわけです。やはり順序としては, まずセンターを強化することでしょう。そして, 機会があったら, 他へも広めることでしょう。」⁶⁾と言っている。

イギリスの大学における日本関係のセンターというのは, ケンブリッジ, オックスフォード, ロンドン大学 SOAS, シェフィールドのいわゆる4大センターが中心であり, そのあと新しくイングランド北部のニューキャッスル大, スコットランドのスターリング大, さらにイングランド南東部のエセックス大とウエールズのカーディフ大が組織作りを行いセンターといえる組織を整えている⁷⁾。コータッチの発言からは現状の日本語教育に対する問題意識が伺われ, その対策としてまず教材・教授法の質の集中型を行うべきであるという考えを述べているわけであるが, 4大センターを中心に新しい教材・教授法の開発が行われているのか, またそれが他の機関に普及しているのかという視点から, イギリスの日本語教育の現状を検討する。

筆者はイギリス滞在中に日本語教育を行っている大学9機関を訪問しインタビュー調査や授業見学などをさせてもらった。また, 1995年2月にそ

5) 1987年に出た政府の大学補助金委員会の諮問に対する答申「イギリスの日本語教育」シュテファン・カイザー『日本語教育年鑑』1991年版アルク参照

6) 「日本との交流・経済交流と日本語教育のあり方について」〈聞き手シュテファン・カイザー〉『日本語教育年鑑』1991年版 アルク

7) 「イギリスの日本語教育」シュテファン・カイザー『日本語教育年鑑』1991年版 アルク

の他の 19 の大学に対して使用教材などについてアンケート調査を行い、16 校、13 の機関から回答を得た⁸⁾。その計 22 の機関の使用教材は、次の通りである。

教 材 名	機関数
1. Japanese for Busy People (講談社インターナショナル)	6
2. Basic Kanji Book (凡人社)	6
3. Japanese for Everyone (学習研究社)	3
4. An Introduction to Modern Japanese (ケンブリッジ大学)	3
5. Situational Functional Japanese (凡人社)	2
6. 24 Tasks for Basic Modern Japanese (ジャパントイムズ)	2
7. 新日本語の基礎(スリーエーネットワーク)	2
8. An Introduction to Modern Japanese (ジャパントイムズ)	2
9. ヤンさんと日本の人々(国際交流基金)〈VTR〉	2
10. 文化初級日本語(文化外国語専門学校)	1
11. 初級日本語(東京外国語大学留学生日本語教育センター)	1
12. Japanese: The Spoken Language (講談社インターナショナル)	1
13. Reading Japanese (チャールズ・イー・タトル)	1
14. Mastering Japanese (マクミラン)	1
15. Modern Japanese for University Students (国際基督教大学)	1
16. Communication Japanese Style (言語文化研究所)	1
17. ようこそ(マクグロウ・ヒル)	1
18. 日本語を楽しく読む本・中級(産能短期大学)	1
19. 日本を読む、日本その社会・文化・歴史(凡人社)	1

8) マンチェスター大学、マンチェスター工科大学、サルフォード大学、メトロポリタン大学の合同研究所としてマンチェスター日本研究所が日本語教育を行っているので、この 4 校を 1 機関として扱った。また、シェフィールド大学だけは 1994 年春の時点での調査による。

20. ちょっとひとこと(朝日カルチャーセンター)	1
21. 絵入り日本語作文入門(専門教育出版)	1
22. 楽しく聞こう(文化外国語専門学校)〈テープ〉	1
23. ニュースで学ぶ日本語(凡人社)〈テープ〉	1
24. 毎日の聞き取り 50 日(凡人社)〈テープ〉	1
25. 日本のくらし 12 カ月(杏文堂)	1
26. An Introduction to Newspaper Japanese(ジャパンタイムズ)	1
27. スタンダード日本語(NHK エデュケーションナル)〈VTR〉	1
28. はじまりはじまり(エセックス大学)〈VTR〉	1
29. Let's Learn Nihongo (SEIKO Corporation) (コンピュータ)	1

このうち英国で開発されたものは4と14と28の3教材である。4はケンブリッジ大学のほかダーラム大学の3・4年生、カーディフ大学の1・2年生対象のそれぞれ日本語と他の二つの専門を持つ joint コースで使用されている。ケンブリッジ大学で日本研究を主専攻とする学生が2学期間・8週間というインテンシブコースのために作成されたものを2年間かけて終了させているわけである。カーディフ大学日本研究センターは、首都カーディフを中心にウエールズに日本企業が数多く進出しているため設置の地として最適であるとしてつくられたもので、「センターの主たる目的の一つは、日本語が話せるうえ、ビジネス及び商業、法律その他に精通した卒業生を相当数社会へ送り出すこと」⁹⁾ となっている。日系企業に就職する卒業生も多いというが、このような学生のための日本語教育はビジネスマンを対象とした教材のほうが学習者のニーズに合うであろう。ケンブリッジ大学と教授法などについての情報交換などは特に行っていないという。14の教材は、日本語の表記が全てローマ字であり、短期間の旅行などで訪日する人が簡単な会話を習得する目的で作成されたものである。これを使用している機関は作成者自身が授業を担当しているエクセター大学だけで

9) 「カーディフ大学における日本語教育」田中圭子『日本語教育年鑑』1991年版 アルク

あり、1995年秋からは使用をやめるという。28は自作の主教材用のビデオ教材である。1部見せてもらったがアイディアに溢れ大変おもしろい教材で、会話を中心の短期間のコースなどには適しているが、まだ試用教材で今後引き続き作成作業が継続されるという。少なくとも今回の調査の範囲では、イギリスで開発された教材はわずかであり、しかも作成した機関以外で使用されているものは一つしかないことがわかった。

イギリスの日本語教育の中心と言われる4大センターのケンブリッジ大学を除く3センターの現状について簡単に触れておく。オックスフォード大学の日本語教育は東洋研究所で行われており、従来1年生をシェフィールド大学に預け、自校では初級の日本語教育を行っていなかったが、1994年の秋から、1年生から4年生までの一貫した日本語教育を始めたばかりである。日本語の担当は日本語を母語とする教師3人で、初級の使用教科書は『Communication Japanese Style』である。学生の能力や到達目標などはケンブリッジ大学と同様であると考えられが、ケンブリッジ大学のように長期にわたり責任を持って日本語教育を担当してきた教師はいない。1年生からの日本語教育を開始し、新たにスタッフの陣容を整えての再出発というところである。シェフィールド大学の日本語教育は日本研究センターで行われており、1994年春の時点で日本語教育は日本語を母語とする6人と、母語としない1人の日本語教師が担当していた。1993～94年の1年生の教科書は『Japanese for Everyone』であり、その前年までは『Introduction to Japanese』(G. Healey)であった。1994～95は『Situational Functional Japanese』に変えたという。目標設定が明らかでなく、カリキュラムの立案や教材選定などに一貫性に欠けるきらいがあるという印象を受けた。ロンドン大学 SOAS は日本語教育ではイギリスで最も古い伝統をもつ。日本語学科 (Japanese Section, かつての主任教授ブライアン・モーランは著書で「ロンドン大学日本語学科」としている)のスタッフは、文学や演劇などの専門を持つ6人の専任 (professor 1人, lecturer 5人)と、日本語教育のみを担当する日本語教育の経験豊富

な日本語を母語とする4人の非常勤講師 (lector) で構成されている。1年生の教科書は『Situational Functional Japanese』で、ビデオの授業では『ヤンさんと日本の人々』、CAIの授業では『Let's Learn Nihongo』で漢字などの指導が行われているが、そのほとんどは非常勤が担当している。専任は2年生以上の日本語も担当していて、日本語教育全体の方針を決定しその責任も負うわけであるが、日本語学科の専任6人のうち3人が新任(1994年秋)というように、これまではスタッフの異動が激しく、そのたびに日本語教育に対する方針が変わってしまうことが多かったという。現スタッフは日本語教育を一層充実させるべく種々の検討を行っているようであり、今後の成果を見守りたい。

コータッチが期待する、センターをベースにして他へ広めるという構想は、現在全てのセンターが必ずしも理想的な教育条件を備えて運営されているわけではないこと。また、前述のように開発された教材がほとんどないこと。唯一の大学生対象の市販教材であるケンブリッジ大学の教科書の場合を見ても、他機関で必ずしも作成意図が活かされた選定がなされているとは思えないことなどを考えると、現状はかなり厳しいと言わざるを得ない。

数字の上からは西欧の中では恵まれた教育条件を持っているイギリスであるが、『海外の日本語教育の現状』によると、日本語教育上の問題点のアンケート結果では、①適切な教材の不足(24機関)、②教員数の不足(13)、③日本文化に関する情報の不足(11)、④教員の待遇が不十分(8)、⑤教授法に関する情報の不足(6)、⑥教授能力の不足(5)・施設等の不備(5)となっており、適当な教材の欲求が最も高いことがわかる。ただこの調査は問題点と思われるものを10挙げておき、その中から最も重要だと思われるものを3つ選ぶ方法であり、イギリスは無記入が10と西欧では一番多い(2位のフランスとオーストリアが3、ドイツ、イタリアは1)ことを考えると、他の西欧の国と比べてそれほど深刻な状態ではないと考えるべきかもしれない。

4 イギリスの日本語教育の課題

イギリスにおける日本語教育の一層の発展を期するため、種々の問題点を整理し今後やるべき課題をしばれば、次の3点になる。

1) 専門家としての日本語教師の養成

イギリスの大学で日本語教育に携わっている教師で、それ以前に日本語教師養成のためのコースを受講したり、日本語教育の経験を持っていた教師はきわめて少ない。日本語を母語としない人の大半は日本の文学や歴史などが専門で日本語ができるからという理由で教え始め、また日本語を母語とする人の場合イギリスに滞在して日本語が母語だからという理由で教え始めたというケースが多い。無論経歴はどうあれ経験を積み研鑽することによって立派な日本語教育の専門家として学生や同僚から信頼されている教師も多いが、今後の日本語教育の一層の充実発展を考えるなら学習者のニーズに合ったカリキュラムの立案や教材の作成・適当な教授法の選択などができる、専門家としての日本語教師が必要である。現在大学によっては日本語教師を公募し、日本からも希望者を募ってできるだけ日本語教育経験のある適任者を探すという方法をとっている機関もあるが、求めているような適任者が応募することは少ない。その大きな要因は待遇の問題である。『海外の日本語教育の現状』によると、イギリスの高等教育機関の日本語教師 133 人のうち専任は 64 人としているが、どのような身分を専任と考えるか機関によって異なっており、日本の社会に置き換えて理解するのは危険である。いわゆる日本のように定年まで勤められる *tenure* の権利を持っている日本語教師は、筆者が聞いた限りイギリスには 1 人しかいない。多くが 1 年から 3 年の短期契約のポストであり、その機関の日本語教育を専門としない責任者からの指示に従い任務に当たるとというのが現状である。したがって、いい教師を集めるためには専任のポストが用意されなければならないが、イギリスの大学で専任のポストを得るにはかなり厳しいチェックを受けなければならない。MA、できれば Ph.D の肩書きと研究業績以外にも、授業だけでなく教授会などでやりとりできる高度

な英語力が要求されるという。このようなことを考えると、日本語教育の実績を持っているイギリスの大学院で日本語・日本語教育を専攻できるコースを開設し、MA や Ph.D が取れるようにするのが最良の方法であろう。現在でも日本語教師養成コースはロンドン大学の External Services Division や民間の施設などで行われ盛況のようであるが、それらを修了しても学歴上の資格が取れない。大学院で講座が開設されれば、資格を持った日本語教師が養成できるというだけでなく、その機関が日本語及び日本語教育研究の核となり、そこで生まれる研究成果は他の機関にも広がっていくはずである。現在はそうした核になる機関が存在しないというのもコータッチの構想を妨げている要因の一つである。筆者が滞在していた1995年春にロンドン大学 SOAS の大学院で日本語・日本語教育関連のコース開設の検討が始められていたが、1996年の秋から日本語学科と言語学科が協力し日本語コースを設ける予定であると聞く。成果を期待したい。

2) 日本語教材の開発

ケンブリッジ大学は以前既存の教科書を使用していたが、例文が全て日本語で書かれていて、かつ十分な文法の説明のある適当な教科書が見当たらないため、新教材作成に踏み切ったという¹⁰⁾。多くの機関が既存の教材で満足していないことは、先に見た日本語教育上の問題点のアンケートで半数以上の機関が「適切な教材の不足」を挙げていることでもわかる。教材を作成することはただ結果として作品ができるだけでなく、その過程でカリキュラム、到達目標、教授法など総合的に日本語教育を考えなければならず、そこに生まれる成果はできあがった教材以上の価値がある。ただ、教材を開発するということはたいへんな労力と時間を割かなければならず、常に2・3年で教師が入れ代わってしまうような状況では到底困難である。そのためには、少なくとも中心になる教師が長期にわたって作業ができる条件を作ることが必要である。状況が許せば複数の機関の教師が

10) 「ケンブリッジ大学における日本語教育」 瓜生温子 『日本語教育年鑑』1991年版 アルク

チームを作り、共同で開発を行うことも考えられる。

3) 日本語教師のネットワーク作り

イギリスの日本語教師の組織に JLA (Japanese Language Association) があるが、これは高等教育機関以外の日本語教師及び学習者を支援し情報を伝えるネットワークの必要性から設立されたものである。主に高等教育機関の教師で組織されている学会としては BAJs (The British Association for Japanese Studies) があるが、ここで取り上げられるテーマは日本研究が中心で日本語や日本語教育が取り上げられることはほとんどない。大学の日本語教師の学会などの公的な組織はなく横のつながりが少ないため、日本語教師間の交流や情報交換はほとんど行われていない。こうした現状を考えると、高等教育機関の日本語教師のネットワークを早急に作る必要がある。そのような組織ができれば、教材や教授法に関する情報交換もでき、機関を超えた共同作業も可能になる。イギリス国内の機関や教師の相互交流だけでなく、核となる組織ができれば、そこを通じて日本との交流もしやすくなり、種々の情報交換も行われるようになるであろう。

5 おわりに

UK-JAPAN 2000 グループが1993年にイギリスの日本語教育を行っている高等教育機関 27 を対象に行った調査によると、各機関の今後の学生数の受け入れ予想の総数は2000年が585人、2002年には640人になるという¹¹⁾。対象となった機関数が少ないため、現時点の学生数より少ないが、この調査で興味深いことは、イギリスの高等教育機関の日本語学習者はここしばらくは増え続けると考えられていることである。そのためにも、課題の早急な実践が急がれる。また、こうしたイギリスの現状を正しく把握し、いかなる形で効果的な援助や手伝いができるのかを日本側の公的機関などが検討することも必要であろう。

11) 『Japanese Language Teaching at British Universities and Centres of Higher Education』 UK-JAPAN 2000 GROUP, 1993

最後に、イギリス滞在中、調査のためケンブリッジ大学、シェフイールド大学をはじめ、ロンドン大学、オックスフォード大学、エセックス大学、ニューキャッスル大学、エジンバラ大学、スターリン大学、カーディフ大学を訪問し、関係者の方々には多大なご迷惑をおかけしたことをお詫びし、お礼を申し上げたい。またアンケートにご協力くださった先生方にも感謝の意を表したいと思う。

参 考 文 献

- 「特集 イギリスにおける日本語教育」『日本語教育年鑑』1991年版、アルク
『海外の日本語教育の現状』国際交流基金日本語国際センター編、1993
『Japanese Language Teaching at British Universities and Centres of Higher Education』UK-JAPAN 2000 GROUP, 1993
蒲谷宏「英国における日本語教育について」『講座日本語教育』第29分冊 1994
スティーブン・ラージ「ケンブリッジ大学の日本研究コース」『日本語教育通信』第21号、国際交流基金日本語国際センター、1994